

日時：平成6年2月16日（水）

場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

〒102 東京都千代田区九段北4-2-52

出席者：

主任研究者  
分担研究者小川 雄之亮  
多田 裕、田中 憲一、  
中村 肇、前川 喜平、研究協力者  
（多田班）末原 則幸、近藤 乾、  
千葉 力、小泉 武宣、三科 潤、  
田中 忠夫、高橋 克幸、小林 俊文、青木 耕治、  
鳥居 裕一、岡井 崇、佐治 文隆、高橋 恒雄

（田中班）

（中村班）

藤村 正哲、佐藤 孝道、  
橋本 武夫、竹内 豊、

（小川班）

李 容桂、小田 良彦、  
友田 昭二、中林 正雄、  
清水 浩、板橋 家頭夫、磯部 健一、志村 浩二  
山内 芳忠、河野 寿夫、後藤 彰子

（前川班）

服部 司、堀内 勁、  
諸岡 啓一、川上 義、犬飼 和久、  
松石 豊次郎、庄司 順一、秦野 悦子  
中江 陽一郎、山口 規容子、

共同研究者

大西 鐘壽、仁志 田博司、光田 信明、石井 史朗  
渡辺 とよ子、明城 光三、名取 道也、梶浦 詳三  
上谷 良行、今村 淳子、奥谷 貴弘、中尾 秀人、  
福田 清一、喜田 善和、勝又 大助、永山 善久、  
庄田 隆、安藤 一人、五十嵐 健康、森 直之、  
川滝 元良、白井 眞美、高木 一江、河野 親彦、  
吉川 はる江、今泉 岳雄、今西 雅彦、

議 事

- (1) 開会挨拶  
主任研究者 小川 雄之亮
- (2) 多田班分担研究報告 多田 裕
- (3) 中村班分担研究報告 中村 肇
- (4) 小川班分担研究報告 小川 雄之亮
- (5) 事務連絡
- (6) 田中班分担研究者 田中 健一
- (7) 前川班分担研究者 前川 喜平
- (8) 全体討議 「多胎をめぐる諸問題」

話題提供： 服部 司 佐藤 孝道 竹内 豊

分担研究「地域周産期医療システムの評価に関する研究」班

議 事 録

I) 第1回分担研究会議

日 時： 平成5年7月12日(月) 12時30分-16時30分

場 所： スクアール麹町

末広(4階)

東京都千代田区麹町6-6(四ッ谷駅前)

(03)3234-8739

出席者：

分担研究者	多田 裕
厚生省母子衛生課	正林督章
主任研究者	小川雄之亮
他の分担研究者	田中憲一
研究協力者	近藤乾 佐藤昌司 末原則幸 柴田隆 千葉力 小泉武宣 三科潤 宇賀直樹
事務局	和田自子

議 題：

- 1) 挨拶(厚生省、主任研究者)
- 2) 研究の進め方に関する検討
- 3) 本年度の研究班の予定
- 4) 事務連絡

II) 第2回分担研究会議

日 時： 平成5年9月28日(火) 11時00分-15時00分

場 所： スクアール麹町

百合(5階)

東京都千代田区麹町6-6(四ッ谷駅前)

(03)3234-8739

出席者：

分担研究者	多田 裕
厚生省母子衛生課	清水美登里
主任研究者	小川雄之亮
他の分担研究者	田中憲一
研究協力者	近藤乾 末原則幸 柴田隆 出良弘 池ノ上克 千葉力 小泉武宣 宇賀直樹 井村総一 小柳孝司(代 吉里俊幸) 仁志田博司
事務局	和田自子

議 題：

- 1) 挨拶（厚生省、主任研究者）
- 2) 地域に応じた周産期医療体系の検討
- 3) 周産期医療施設の要員に関する検討
- 4) 周産期医療の研修に関する検討
- 5) 後方施設、病棟に関する検討
- 6) 地域搬送体制に関する検討
- 7) 事務連絡

Ⅲ) 第3回分担研究会議

日 時： 平成6年1月29日（火） 10時00分～12時30分

場 所： 後楽園会館会議室

東京都文京区後楽1-7-22

(03) 3815-8171

出席者：

分担研究者	多田 裕
主任研究者	小川雄之亮
他の分担研究者	中村肇（代 上谷良行）
研究協力者	近藤乾 末原則幸 柴田隆 池ノ上克 三科潤 千葉力 小泉武宣 宇賀直樹 井村総一 小柳孝司（代 佐藤昌司） 光田信明 柏木愉理 池田智明

議 題：

- 1) 挨拶
- 2) 分担研究者の研究発表
- 3) 地域周産期医療体系の検討
- 4) フォーラムでの検討での議題に関する検討
- 5) 事務連絡

IV) 平成6年度フォーラム「地域周産期医療システムを考える」  
(小川班と本分担研究班の共同開催)

日時： 平成6年1月29日(火) 12時30分-17時00分

場所： 後楽園会館大会議室

東京都文京区後楽1-7-22

(03)3815-8171

出席者：

分担研究者	多田 裕
主任研究者	小川雄之亮
他の分担研究者	中村肇(代 上谷良行)
厚生省母子衛生課	清水美登里 正林督章
研究協力者	近藤乾 末原則幸 柴田隆 池ノ上克 三科潤 千葉力 小泉武宣 宇賀直樹 井村総一 小柳孝司(代 佐藤昌司) 光田信明 柏木愉理 池田智明 犬飼和久 石塚祐吾 溝部直樹 新津直木 佐藤啓治 白井眞美 飯沼和江 中林正雄 山口規容子 亀山順治 橋本武夫 内田章 竹村喬 樋口正俊 後藤彰子 野口圭一 佐藤郁夫 山中龍宏 武田佳彦 中川恒男 佐藤章 竹内豊 山南貞夫 奥起久子 戸苅創 田村正徳 三輪百合子 仁志田博司 板橋 家頭夫 大野勉 小田良彦 永山義久 志村浩二 桑原勲 五十嵐健康 山内芳忠 岡村敏弘 加部一彦 藤村正哲 宮本泰行 岩瀬一弘 吉永宗義 大崎逸朗 川上義 本多洋 田中忠夫 鳥山義仁 神保利春 高嶋幸男 河野寿夫 立石格 磯部健一

議 題：

- 1) 挨拶(主任研究者 厚生省)
- 2) 討論
  - (1) NICUの現状と問題点
  - (2) 産科医療の現状と問題点
  - (3) 周産期医療のあり方
  - (4) 周産期医療における1次、2次、3次医療
  - (5) 今後の整備の方向

分担研究 「ハイリスク児の予防に関する研究」班

議事録

I) 第一回分担班会議

日時：平成5年9月14日(火) 午後2時～5時

場所：ルーテル市ヶ谷センター 会議室

出席者：田中忠夫(代理：星田朝乃)、高橋克幸、明城光三、小林俊文(代理名取道也)、青木耕治(代理：梶浦詳二)、鳥居裕一、岡井崇、佐治文隆(代理：木村正)、佐藤孝道、山田義治、高橋恒男、藤村正哲、中山千夏(事務局)

議事：

- 1, 本年度も本研究班が継続される旨正式に連絡のあった事及び厚生省よりの要望、注意事項の説明が分担班長より報告された。
- 2, 本年度の厚生省よりの以下のリサーチアクションが呈示され本年度の研究の進め方について討議された。
  - ① 不妊症治療特に体外受精と多胎との関連性。
  - ② 早産予防のための妊婦検診体制はどのようにあるべきか。
- 3, 種々の討議の結果、本年度は以下の研究を行う事となった。
  - ① 多胎の原因として体外受精より一般の診療所、病院で使用されている排卵誘発剤の使用があげられる事より、分担班参加10施設を対象として過去2年間の不妊症治療後(体外受精、AIH、排卵誘発剤使用)の妊娠経過について調査を行う事とした。
  - ② 現在行われている妊婦検診制度、特に早産予知にポイントをおいた検査について、全国の大学病院及び分担班所属施設の関連病院を対象としてアンケート調査を行う事とした。
  - ③ 分担班所属10施設を対象として、過去2年間に切迫流産症例に対して行った検査法及び治療法について調査を行い、有効なもののリストアップを行う事とした。
  - ④ 本研究班の特色を出すため感染症と早産の関連性についてプロスペクティブスタディを行う事とした。
- 4, 今後の予定
  - ・ 班総会は平成6年2月中旬頃、場所未定
  - ・ 次回の班会議は平成6年1月下旬
  - ・ 事務連絡はFAXで行う事とした
  - ・ 中山千夏：TEL025-223-6161内線2623、FAX025-225-5550

II) 第二回分担班会議

日時：平成6年2月4日(金) 午後1時～5時

場所：スクワール麴町(東京) 会議室

出席者：田中憲一、石井史郎(新潟大)、小林俊文、名取道也(慶応大)、佐藤孝道、山田義治(虎ノ門病院)、田中忠夫(国立大蔵病院)、高橋恒男(横浜市大)、青木耕治、梶浦詳二(名古屋市大)、鳥居裕一(聖霊浜松病院)、北島博之(大阪府立母子保健総合医療センター)、明城光三(国立仙台病院)、岡井崇(東京大)

議事:

- 1, 田中憲一分担班研究者より挨拶、研究成果の発表における注意事項、会計報告、研究報告書作成の注意があった。
- 2, 研究事項についての報告があった
  - 1) 切迫早産患者の管理法に関するアンケート調査報告  
検討事項: 施設毎の検討では地域の特殊性、NICUの有無について検討が必要
  - 2) 不妊症治療後妊娠と分娩に関するアンケート調査報告  
検討事項: 不妊症治療後単胎妊娠での検討が必要  
コントロールの取り方に問題あり  
新生児仮死に関しては1500g未満を除いて検討すべき  
児の予後に関しては出産に起因するもの、児に起因するものに分けて考えるべき
  - 3) 早産予知、予防に関するアンケート調査報告  
検討事項: 施設毎の早産率、平均管理日数は母体搬送数、早産の診断基準の違いなどからそのまま施設の管理状況を反映するとは考えられない  
労働に軽重と分娩週数について再検討を要す  
検査法と予知、予防に関して前方視研究が必要である
  - 4) NICUにおける多胎と不妊症に関するアンケート調査報告  
北島博之班員  
(大阪府立母子保健総合医療センター)  
検討事項: 入院台帳で判明する内容に関してはよく記載されている  
予後について回答が悪いのは、比較的大きい児でフォローしていない可能性がある  
多胎の入院に伴うNICUの受け入れ体制については興味ある結果  
胎児数と在胎週数の相関  
胎児数と受け入れ対策の内容の相関などを検討する必要がある
- 3, 次年度プロスペクティブ・スタディーに関する施行上の問題点について質疑応答が行われた

分担研究 「ハイリスク児の調査に関する研究」班

I) 第1回分担研究会議

日時: 平成5年4月16日(金) 12:30~17:00

場所: 大阪ガーデンパレス会議室

出席者:

中村肇、橋本武夫、李容桂、竹内豊(喜田善和)、永山善久(小田代理)、大野勉(勝又大助)、中林正雄(安藤一人)、竹峰久雄、友田昭二、今中基晴(荻田代理)、天野完・黒須不二男(西島代理)事務局(上谷良行・奥谷貴弘・今村淳子)

- 1、 班長より超未熟児の予後に関する全国調査の進め方について説明があった。
  - ・ 対象は平成3年の石塚調査での超未熟児生存例とする。
  - ・ 予後評価法について  
今後就学前の調査も行なうのであれば3歳児の評価は統一されたものがよい(たとえ対象患者数が減少しても)。  
津守・稲毛式も併記のかたちで記入してもらう。
  - ・ 一次調査: 本調査に協力出来るか否かを対象施設の小児科(NICU)責任者に確認する。  
郵送先対象施設の責任者の変更がないかを地域ブロック別に班員で手分けして確認作業を行なう。  
同封するもの-調査依頼用紙、返信用はがき、施設別対象患者リスト、遠城寺式発達検査表の記入のしかた
  - ・ 二次調査: 協力可能な施設に個人別全国調査票及び遠城寺式発達検査表を送付し、回収する。
- 2、 仮死の発生要因に関する前方視研究について、中林班員より説明があった。
  - ・ 初年度報告書について、ハイリスク児の予備調査の結果で予後不良例に先天異常が含まれていることによる誤解が生じる可能性が指摘された。また、次年度への課題として仮死児の全国調査に関してはこの研究班で実施するには無理があり、今後の布石として調査のすすめかたについて検討するのが妥当である。
  - ・ 前年度に実施した調査を踏まえて、より簡潔な内容の調査票を作成したので、1993年5月以降の仮死症例についてエントリーしていただきたい。
  - ・ 新生児のチェック項目に関しては大野班員を中心にフォームを作成する。
- 3、 竹内班員より超未熟児の発生要因に関する前方視的調査について説明があった。
  - ・ 調査票を作成したので本年6月頃より超未熟児の入院例について記載して欲しい。
  - ・ 多胎について様々な問題があるので、この班でぜひ取り上げたい。
  - ・ 多胎の問題点
    1. NICUのベッドの長期占有
    2. 予後不良例が多いこと。
    3. 有病率の高さ
    4. 家族の経済的、精神的、肉体的負担 等
  - ・ 過去10年間のうち3年(82,87,92年度)のNICUにおける多胎の頻度について調査すればどうか。

4、今後の予定

- ・超未熟児の全国調査について、一次調査終了後新生児関連の班員のみ東京で班会議を行なう(5月17日、場所未定)。
- ・仮死調査は本年中に集計して、本年度に報告書を作成する。
- ・超未熟児調査は本年度中の集計は実施しない。
- ・各個研究は、前年度と同様に自由に実施していただく。

事務担当：上谷良行 tel.078-341-7451 fax.078-371-6239

II) 第2回分担研究班会議

日時：平成5年5月17日(月) 12:30~16:00

場所：アルカディア市ヶ谷会議室

出席者：

中村肇、橋本武夫、李容桂、竹内豊、小田良彦(永山善久)、  
大野勉(勝又大助)、竹峰久雄(野中路子)、新宅治夫(萩田代理)  
石塚祐吾、正林督章(厚生省)、事務局(上谷良行)

- 1、厚生省正林技官より今年度もこの班が継続される旨報告があった。
  - ・周産期医療整備費の執行のためのも具体的な将来計画を早急にたてる必要がある。限られたマッワーを有効に利用するための方策を検討していただきたい。
  - ・各地域で必要な施設数・ベッド数を思い切って呈示するべき時期にきているには。
- 2、事務局より超未熟児の予後に関する全国調査一次調査の結果について報告があった。
  - ・対象施設：265
  - ・対象超未熟児数：1385例
  - ・返答179施設(5月31日現在)
    - はい：163施設、1026例(74%)
    - いいえ：16施設、48例
  - ・フォローアップは170施設中152施設が自施設で実施している。
  - ・期間は小学校就学までが約半数であった。
  - ・予後評価法について
    - 遠城寺式 - 45%、津守・稲毛式 - 53%で遠城寺式を採用していない施設の73%が津守・稲毛式を採用していた。

<今後の作業>

- ・地域ブロック別の班員責任者が地域の協力を介して、一次調査の返事の督促、いいえの施設への協力依頼、本調査の督促などを行う。
  - 北海道：小田良彦(南部春生・服部司)
  - 東北：竹内豊
  - 関東：大野勉
  - 中部A：小田良彦
  - 中部B：竹峰久雄(志村浩二)
  - 近畿：中村肇
  - 大阪：李容桂
  - 中・四国：中村肇(山内芳忠)
  - 九州：橋本武夫

- ・各班員に施設別返答状況最終版を事務局より送付する。
- ・第1回調査用紙回収期限が8月末であることをはがきで8月初旬に再度通知する。
- ・受取通知、礼状を怠らぬこと。



- 3、 仮死の発生要因に関する前方視研究について、大野班員より新生児所見記入用紙の説明があった。
  - ・ フォームを修正の上、産科用の新生児調査票とともに印刷し、各班員に送付する。
- 4、 竹内班員より超未熟児の発生要因に関する前方視研究について説明があった。
  - ・ 調査票を作成したので本年6月頃より超未熟児の入院例について記載して欲しい。
  - ・ 多胎についての調査用紙も作成中であり、9月頃には配布できる見込みである。
- 5、 班長より予後の全国調査結果を踏まえて障害のある児に対するケアを如何に行なうべきであるか来年度へ向けての提言をまとめる必要がある旨説明があり、討論が行なわれた。
  - ・ 障害のある児がどのようにしてサポートされ、ケアされているか、今後どうするべきかを明らかにせねばならぬ。
  - ・ 医療と福祉のドッキング。まず現状把握から。
  - ・ フォローからのドロップアウトがどの程度かを今回の集計で明らかにして今後のフォローシステムを考える。
  - ・ お礼状の際にフォローしていく上での問題点のアンケートを行なえば？
  - ・ 保健所、保健婦との連携が重要。
- 6、 今後の予定
  - ・ 超未熟児の全国調査について、8月末に中間集計し、班員に報告する。
  - ・ 次回の班会議は年度末に行なう。

事務担当： 上谷良行 tel.078-341-7451 fax.078-371-6239

### Ⅲ) 第3回分担研究会議

日時: 平成5年9月28日(火) 11:00~15:00

場所: スクワール麴町会議室

出席者:

中村肇、出良弘(橋本代理)、李容桂、竹内豊(喜田善和)、小田良彦(永山善久)、大野勉(勝又大助)、野中路子(竹峰代理)、友田昭二、中林正雄(安藤一人)、天野完(西島代理)、鈴木文晴、石塚祐吾、清水美登里(厚生省)、事務局(上谷良行、奥谷貴弘、今村淳子)仁志田博司(オブザーバー)

- 1、本年度も研究班が継続される旨正式に連絡の有ったこと、他の分担研究班の状況説明が班長より報告された。
- 2、事務局より超未熟児の予後に関する全国調査二次調査中間集計の結果について報告があった。
  - ・対象超未熟児数: 1283例→前期(7月末) 該当件数: 746例
  - ・返答総数266例(36%)
    - 追跡不能 45例(死亡17、転院10、転宅10、不明8)
    - 死亡例の検討(入院中の死亡、退院後の死亡時期等)が必要
    - 検診時月齢が30か月未満の症例が41例あり、今回残りの180例について検討した。(41例については再度検診を依頼する)
  - ・脳性麻痺あり27例(15%)、境界3例(2%)、記載もれ1例で脳性麻痺の半数は自力歩行可能であった。
  - ・失明5例(3%)、聴覚障害5例(3%)、てんかん12例(7%)
  - ・総合発達評価 正常94例(69%)、境界16例(12%)、異常25例(19%)  
記載もれ45例であった。  
遠城寺式DQが算定できないために記載されていなかった。  
総合評価 正常の中にCPが4例ふくまれていた。
- 3、事務局より、遠城寺式の評価結果について説明があった。
  - ・項目別DQ平均値ではCPを除いた対象群で各項目ともほぼ100であり、コントロールの健常3歳児の120と差が見られた。
  - ・通過率においても健常3歳児と特に言語理解の項目で差が見られた。(全国調査の今後の作業)
  - ・記載もれの調査票は再度返送する。
  - ・事務局から地域ブロック別の班員責任者へ二次調査の回収状況を送付するので(10月20日までに)、班員は各施設の担当者に督促し、未熟児新生児学会で協力依頼を念押しする。
  - ・事務局において遠城寺式での総合評価の基準を作成する。
- 4、多田班長より多田班の状況の報告があった。  
NICUの適正配置について、3次施設をある程度限定し、物的・人的補助を行なうと同時に、2次施設(PICUを含めて)の整備を行うこと提言することになるとの見通し。
- 5、竹内班員より超未熟児の発生要因調査、多胎の調査について説明があった。
  - A. 超未熟児 調査期間: 平成5年6月~6年5月まで、中間集計はしない。
  - B. 多胎
    - ・今回は多胎児のNICU占有率が如何に高くなっているかを調査することに主眼を置くため、あまり詳しい内容の調査は実施しない。  
対象: 1982年、87年、92年に入院した多胎(1例でも)。
    - ・小川班でも多胎の調査があるので、連絡をとって調査内容の重複を避ける。
    - ・小児科関係の班員施設のみで調査し、年内に回収したい。
- 6、中林班員より仮死の調査について説明があった。
  - ・現在は、班員のみで調査しているが、日母が将来全国規模の調査を実施することになる見通しであり、その基礎調査ともなる。

- ・今年度中に中間報告をする。 返送先は東京女子医大へ
- 7、清水課長補佐より挨拶があった。
- 死亡診断書の書式が変更され、かなり詳しい情報が得られるのでそれを念頭において今後の調査を進めて欲しい。
- 8、各個研究について各班員より説明があった。
  - ・李班員：大阪府における新生児の死亡登録事業について
  - ・竹内班員：重心児へのサポートを考える基礎データとして地域での実態を把握したい。
  - ・友田班員：早産、重症妊娠中毒症分娩が予防可能であったか。後方視的に症例を検討する。
  - ・小田班員：慢性肺障害がどの程度続くのか、気道過敏性との関連等。
  - ・大野班員：22,23週の児の入院症例が多く、ROPの頻度が極めて高いので、その管理法の検討と予後について。
  - ・西島班員：fetal distressで帝切になった児の予後の解析より、モニタリングが胎児心拍数のみでよいか検討する。
  - ・中林班員：臍帯血pHと児の予後
- 9、今後の予定
  - ・今年度の班総会は平成6年2月16日(水) 場所未定
  - ・次回の班会議は2月10日(水) 12:30より新大阪で行なう。会場は追って連絡する。

事務担当：上谷良行 tel.078-341-7451 fax.078-371-6239

#### IV) 第4回分担研究班会議

日時：平成6年2月10日(木) 12:30~17:00  
 場所：メルパルク大阪(新大阪) 会議室

出席者：

中村肇、小川雄之亮(主任研究者)、橋本武夫(出良弘)、竹内豊(喜田善和)、中林正雄(安藤一人)、大野勉(勝又大助)、天野完・庄田隆(西島代理)、李容桂、野中路子(竹峰代理)、友田昭二、鈴木文晴、永山善久(小田代理)、多田裕、石井史郎(田中代理)、石塚祐吾(オブザーバー)、事務局(上谷良行、奥谷貴弘、今村淳子)

- 1、小川雄之亮主任研究者より挨拶及び会計報告、研究報告書作成上の注意があった。
  - ・会計報告書：消費税の内訳を明確に
  - ・研究報告書：研究協力者は定められた様式で。そのまま写真印刷の予定
  - ・マスコミへの発表の際には必ず主任研究者の了解を得ること。
- 2、中村肇分担研究者より研究報告書の締切は2月16日とする旨要望があった。
- 3、共同研究事項について報告があった。
  - 1) 超未熟児予後の全国調査集計結果報告(中村分担研究者)
    - ・総発達評価基準
    - M Rは遠城寺式発達検査票で対人関係・発語・言語理解の3項目の項目別D Qを修正月齢で判定(正常：80以上、境界70~79、異常70未満)。
    - 異常：1)、2)、3)のうちひとつ以上がある場合。
      - 1) 自立歩行が不可能な脳性麻痺
      - 2) 失明(片眼、両眼どちらでも)
      - 3) M R：2項目が異常+1項目が異常または境界
    - 境界：1)、2)のうちひとつ以上がある場合。
      - 1) 自立歩行が可能な脳性麻痺

2) MR: 次のいずれかに相当するとき

- a) 1項目が異常+1項目が異常または境界
- b) 3項目がいずれも境界

正常: 上記以外

- ・主治医評価と事務局遠城寺式評価とほぼ一致していた。
- ・対象施設265回答施設191(72%)
- ・調査票配布総数1385回収調査票1105(80%)
- ・解析対象(30か月以上追跡症例)828症例で、地方別、施設別ランク別に検討した。
- ・正常率75%、異常率14%、境界率11%で、  
地方別: 北海道・東北で正常率が高く、異常率が低い  
近畿・中四国で正常率が低く、異常率が高い  
施設ランク別; ABCの順で正常率が高く、異常率が低かった。  
A群中では超未熟児入院数の多い3Aで正常率が低かったが、異常率も低かった。
- ・在胎周数別後障害発生率は26週ではじめて平均を下回り、全体のプロフィールは超未熟児の在胎週数別新生児死亡率のプロフィールと極めて類似していた。
- ・出生体重別後障害発生率は700gではじめて平均を下回りプロフィールは同様に出生体重別新生児死亡率とよく類似していた。
- ・対象例では女児数が多く(53%)、正常率も男児に比して高く、異常率も低かった。
- ・視力障害(失明+弱視)は66例(8%)に認め、在宅酸素療法は31例(4%)、喘息など呼吸器系の後障害を高頻度(15%)に認めた。
- ・転院、転宅などで追跡不能となる症例が4分の1あり、今後への問題である。
- ・検討事項: 地域別格差の原因は? 男女の比率の差か?  
新生児死亡率と後障害発生率のグラフの相似性を数値化できないか?  
片眼失明を異常とするのはどうか?
- ・公に結果を公表する場合には、境界・異常をまとめてDiscussionせず、正常・境界・異常の3群に分け、それぞれにfollow upの重要性を指摘する。
- ・同様の調査を5~10年ごとに実施すべきであり、その年に各種の調査もあわせて実施するような調査年度を決める必要がある。
- 2) 仮死児の発生要因に関する研究中間報告(中林班員)
- ・仮死の発生要因に関するアンケート調査で32例の回答があった。後障害2例、死亡2例でいずれも院外出生であった。
- ・院外出生で予後が悪い要因として
  - a) CTGの解釈、特に臍帯因子のとらえ方の問題
  - b) 蘇生技術の未熟
  - c) 症例の選択(時間が経過してから紹介される)の問題が指摘された。
- ・その予防として
  - a) 分娩誘発、促進に十分な注意を!
  - b) CTGで臍帯因子を早くとらえ、適切に判定すること  
装着時間も重要な要因である。
  - c) 蘇生技術の習得……卒後教育で
- ・アンケートの実施期間を平成6年12月までとする。
- 3) NICUにおける多胎児管理の推移に関する研究報告(竹内班員)
- ・7施設より回答があり、1982年、87年、92年で入院児に対して4.9%、7.5%、6.9%であった。
- ・不妊治療数が92年で著増し、双胎の5.7%、品胎の33.3%、四胎では100%を占めた。
- ・児の平均入院日数が92年で約50日と82年、87年より10日

延びていた。また、発達予後も境界・異常率が87年より約10%と著増した。予後は品胎、四胎よりむしろdiscordant twinの方が悪かった。

- ・調査は6月まで実施する。今後は過去5年くらいで対象施設を増やし、簡単な項目で調査したい。
- ・検討項目：双胎と品胎以上をわけて検討すべきである。  
多卵性と一卵性で差はないか？

#### 4、各個研究について報告があった。

##### 1) 胎児仮死診断の現況と発症要因 (西島班員)

- ・胎児仮死の診断は胎児心拍数所見によってなされており、超音波ドップラー血流速度分析や臍帯穿刺による血液ガス分析などの導入によっても胎児仮死の頻度に変化はみられていない。
- ・胎児仮死例の予後を見ると、新生児死亡に胎児奇形や染色体異常が多く、後障害に胎盤早期剥離が多かった。

##### 2) 重症妊娠高血圧症の予防 (友田班員)

- ・妊娠中の適正なカロリー摂取と減塩食により重症妊娠高血圧は予防しうる。

##### 3) 正期産児重症仮死の周産期要因と予後 (李班員)

- ・予後不良の症例で胎児仮死の原因が推測できたのは11例中6例であった。
- ・予後に影響する周産期要因は重症新生児仮死と重症HIEであったが、その原因である胎児仮死の発症時期、重症度、誘因は不明な点が多かった。

##### 4) 在胎24週未満の超未熟児に関する研究 (大野班員)

- ・在胎24週未満の超未熟児の死亡率は高く、特に生後24時間以内の早期死亡が多い。
- ・これらの超未熟児の管理には分娩直後のショックと皮膚の管理が重要である。

##### 5) 超未熟児の呼吸器系の予後 (小田班員)

- ・慢性肺疾患を併発した超未熟児はNICU入院が長期化し、退院後も高率に喘息様症状をおこすことより、これらの児には長期にわたる育児支援が必要である。

##### 6) 東京都多摩地区の3市における最近の脳性麻痺・重症心身障害の発生状況のまとめ (1990-1991) (鈴木班員)

- ・2年間の出生6211中脳性麻痺は10で、発生率は出生1000あたり1.61であった。
- ・発生率は近年変化はないが、障害の程度は重症化しており、これらの児に対する対応も十分考慮する必要がある。

分担研究 「ハイリスク児の管理に関する研究」班

1, 第一回分担班会議

日時：平成5年9月1日（水） 12:30～16:00

場所：スクワール麴町 TEL 03-3234-8739

出席者：

分担研究者	小川 雄之亮			
厚生省母子衛生課	正林 督章			
主任研究者	小川 雄之亮			
他の分担研究者	田中 憲一	前川 喜平	中村 肇	
	多田 裕			
研究協力者	河野 寿夫	川滝 元良		
	後藤 彰子	森部 直健		
	堀内 勁	服部 浩司		
	板橋 家頭	志村 浩二		
	山内 芳忠	江口 秀史		
	竹内 敏雄			

議 題：

- ① 分担研究者挨拶
- ② 厚生省母子衛生課係官挨拶
- ③ 研究員紹介
- ④ 本年度研究計画概要説明
- ⑤ 各個研究計画発表、討議
- ⑥ 事務連絡

2, 第二回分担班会議

日時：平成6年2月2日（水） 12:30～17:00

場所：スクワール麴町 TEL03-3234-8739

出席者：

分担研究者	小川 雄之亮			
主任研究者	小川 雄之亮			
他の分担研究者	中村 肇	多田 裕		
研究協力者	堀内 勁	竹内 敏雄	板橋 家頭	夫 馨
	磯部 健一	志村 浩二	安次 元	川 滝 良
	清水 浩	後藤 彰子	山内 芳	河野 寿夫
	服部 司	森 直		

議 題

- ① 分担研究者挨拶
- ② 班員の各個研究報告
- ③ 分担研究者の研究のまとめ
- ④ 班総会の打ち合わせ
- ⑤ 事務連絡

I) 第一回班会議

日時: 平成5年4月16日(金)午後1:30~5:30

場所: 日赤会館105号会議室

出席者: 多田裕、山口規容子、諸岡啓一、前川喜平ほか17名

議事

報告事項

- 1, 平成4年度研究成果のまとめと平成5年度の研究予定

検討事項

極小未熟児の就学前発達について

- 1) 諸岡委員を中心に小児神経グループで作成した極小未熟児就学前発達プロフィールの最終案が示され、検討の結果2~3の修正の上でこれを正式に印刷し、使用することとした
  - 2) 極小未熟児の就学前の発達について、聖隷浜松病院27例、日赤医療センター14例の結果が示され、これについて討議された  
なお、最終的な診断については検討委員会を設けて改めて検討する事とした
  - 3) 平成6年度極小未熟児の就学前発達チェック: 各施設において10月までに行うことにした
- 2, 2才、3才発達プロフィール  
前川、諸岡グループの作成した案について討議をおこなった  
2才児に関しては問診項目を多くし、実際の診察項目は最小限とし全員、新版K式テストを施行する。3才児については当日の討議を基にして次回に改めて検討することにした
- 3, early intervention
    - 1) 外国の文献  
前川、庄司よりこれに関する外国の文献が紹介された
    - 2) 親の養育態度: この事に関しては庄司、神谷委員が担当し、以前よりチェックリストを検討中であったが、大阪府立母子保健総合医療センターで作成した超未熟児の学齢期総合検診報告書などが紹介された。これに基づいて養育態度チェックリストを次回の班会議までに作成する事とした
    - 3) early intervention  
東京女子大、自治医大、聖隷浜松病院、日赤医療センターなどより、9月から開始予定の極小未熟児のearly intervention(案)の大意が示された。  
early interventionの目的は、親の養育態度改善と育児不安を解消すること、そのような場を提供すること、組織をつくることを目的とし、その方法は各施設により可能な独自の方法で行う事とした。但し2才、3才児の発達プロフィールは同一の方法を使用しておこなうこととした。成果についても、対象(コントロール)に比較して発達がどのように異なるかより、interventionを受けた症例についてどのような変化が見られたかも評価の方法であることなどが討議された。
  - 4, 次回の研究班会議は、第二回班会議が6月25日(金)、第三回は11月5日(金)とする。  
第二回班会議には以下のことを検討する
    - 1) 極小未熟児就学前発達プロフィールの印刷(前川)

- 2) 2才児発達プログラム(最終案)の作成(諸岡小児神経グループ)
- 3) 3才児発達プログラム(案)の作成(諸岡小児神経グループ)
- 4) 親の養育態度チェックリストの作成(庄司、神谷委員)
- 5) 各施設におけるearly interventionの概要

## II) 第二回班会議

日時: 平成5年6月25日(金)午後2:00~6:00

場所: 日赤会館106号会議室

出席者: 正林督章、山口規容子、諸岡啓一、神谷育司、前川喜平他19名

### 議事

正林先生コメント:

対象は極小未熟児であるが、境界児、LDとなるであろう漠然とした群も含め、これのearly interventionを行う事と、プログラムを設定し、効果が明確となるような配慮をおこなうこと。

### 検討事項:

- 1、極小未熟児の2才、3才の発達プログラム  
第一回会議で(案)として提出した前川、諸岡のプログラムを基にして、諸岡が作成した2才、3才の発達プログラム(案)について討議を行い、実際に使用するプログラムを作成した。これを早急に印刷する予定である。
- 2、極小未熟児のearly intervention  
自治医大、埼玉小児医療センター、松戸市(松戸市立病院新生児科)  
日赤医療センター、東邦大小児科、女子医大周産期センター、聖隷浜松病院  
久留米大小児科が中心になって行われる極小未熟児に対するearly interventionの各施設における準備状況の説明と検討を行った。  
early interventionは、遊びを主とした楽しいものとする。各施設の具体的方法について庄司がアンケートをとり纏める事とした。また、各施設で情報交換を行い、より効率の高いものとする。
- 3、極小未熟児の就学前発達チェック  
前川、川上が中心となって日赤医療センターで行っている正常と思われる極小未熟児就学前の発達チェックの22名についての検査結果と、女子医大集産期センター16名のまとめの報告とこれらの検討が行われた。  
なお、本年度は各施設において就学前発達チェックを施行する。
- 4、親の養育態度の評価について  
神谷、庄司が作成した文章完成法によるものとアンケートによる2案が示され、これについての討議がおこなわれた。その結果この2案をearly interventionの前後に行うこととした。

次回班会議は、11月5日(金)午後2時より慈恵医大においておこなう。

## III) 第三回班会議

日時: 平成5年11月5日(金)午後2:00~6:00

場所: 日赤会館106号会議室

出席者: 前川喜平、山口規容子、諸岡啓一、神谷育司、甘楽重信、以下16名



## 議事

- 1、各施設における極小未熟児のearly interventionの実施状況
  - ① Teen Angel小さな天使（久留米幼児教育研究所）  
聖マリア病院の極小未熟児、久留米大小児科
  - ② 巢立ち会（自治医大リハビリテーション科小児訓練室）  
小山巢立ちの会（白鷗女子短大大学附属 白鷗おもちゃライブラリー）  
自治医大未熟児室極小未熟児、自治医大小児科 他
  - ③ すくすく外来（埼玉県立小児医療センター病院の講堂）  
同NICUの極小未熟児の小児神経科と埼玉衛生短期大学 他
  - ④ きらきら星の会（日赤医療センター、保健センター）  
同NICUの極小未熟児、日赤未熟児科、慈恵医大小児科、  
川村学園女子大学 他
  - ⑤ 親子の会（仮）（松戸市立中央保健センター）  
松戸市立病院NICU極小未熟児、松戸市立病院新生児科、松戸市衛生部  
聖徳短期大学、慈恵医大小児科 他
  - ⑥ すくすく体操教室（女子医大附属体育館）  
女子医大周産期センター極小未熟児、周産期センター小児科、 他
  - ⑦ ホットソングクラブ（聖隷浜松病院体育館）  
同NICUの極小未熟児、同小児科、名城大学、 他

以上の施設よりearly interventionの実施状況について説明があり、多くの討論があった。

## 2、平成6年度就学予定の極小未熟児の発達調査の進行状況

- 1) 聖隷浜松 NICU（犬飼、河野、神谷）
- 2) 東京女子医科大学母子総合医療センター（山口）
- 3) 埼玉県立小児医療センター（奈良）
- 4) 日赤医療センター（中江、前川、川上、秦野）
- 5) 東邦大学（大森）（諸岡）
- 6) 聖マリア病院（松石）

上記施設よりの発達チェックの結果が発表になったが、脳性麻痺、精神遅滞、などの大きい障害のある児は少なく、これに反し、境界やIQは正常範囲でも動作性と言語性に15以上差のみられるものや、微細神経徴候のみられるものが60～70%に存在した。

## 3、各個研究

- 1) 極小未熟児で紹介された児の主訴と経過観察結果（落合、甘楽）
- 2) 学習障害児の診断（平谷）

## 4、今後の課題

- 1) Early interventionの具体的評価法
- 2) 極小未熟児の学童の評価法（wide range achievement testなどの日本版の作成など）
- 3) LDの定義：Early intervention並びに発達チェックで問題が発見された子供達の診断名と扱い方など

## 5、平成5年度前川喜平班班会議

平成6年1月28日（金）

- ① 各施設共、early interventionの実施、状況まとめと就学児発達のまとめを行う
- ② Early intervention全体のまとめ表の作成（庄司）
- ③ 小川班会議 2月16日（水）
- ④ 平成6年度研究計画

#### IV) 第四回班会議

日時：平成6年1月28日(金)

場所：慈恵医大内第一会議室

出席者：山口規容子、諸岡啓一、神谷育司、前川喜平、他20名

#### 議事

- 1、極小未熟児の就学前発達について  
久留米大(聖マリア病院)、聖隷浜松病院、埼玉県小児医療センター、女子医大(周産期センター、日赤医療センター(日赤、慈恵医大)、自治医大より)の報告があった。我々の作成したプロトコルに従ってテストすると、脳性麻痺、精神遅滞など全盲などの障害児は以外に少ないが、全く正常である率は28~35%である。知能指数が正常(85以上)で、視運動機能、認知、行動面などで問題のある小児、知能が境界である小児や、運動面についてはclumsy、微細脳障害、軽度CPなどgrey zoneにある子供達の判定をいかにするかについて活発な討論がなされた。そして、現時点ではテストの結果のみを記載し、意味付けはこれらの小児が入学してから再テストを行い、その結果を加味して行う事とした。また、運動障害の判定について諸岡委員を長とする小委員会が結成された。
- 2、極小未熟児のearly intervention実施状況について  
現在早期介入が行われている久留米、聖隷浜松、女子医大、日赤(日赤・慈恵)、松戸中央保健センター(松戸市立病院・慈恵)、埼玉小児、自治医大(2ヶ所)より実施状況について資料、ビデオなどをもとにして報告がなされている。各施設共にいろいろと工夫をこらし、今のところ順調に行われている。実施中の怪我について現在、聖隷浜松と日赤で実施している保健についての紹介があった。
- 3、early interventionの評価について  
早期介入を受けている小児についての評価と実施群とコントロール群についての評価を多面的に行う事とした。いづれにしても現時点では記録をよくつけるようにする。  
実際の方法については次年度の課題とする。
- 4、平成5年度の研究成果のまとめと発達方法について  
我々の成果を現在新生児医療に携わっている人々が失望しないよう、また未熟児の親達にいたづらに不安を与えないことなどを配慮しておこなうことが話し合われた。また、本研究は周産期グループと発達・療育グループが有機的に結びつき、地域においてハイリスク児の健全育成をおこなうことを目的とすることが再認識された。前川が作成した保健婦のための手引書は小冊子としてまとめることとした。
- 5、平成6年度研究計画について  
我々の研究計画では、早期介入は2~4才で、最終評価は就学前であるが、平成6年度に早期介入の評価を行う事と、平成4年度に就学前の発達チェックをおこなった極小未熟児について入学後の再チェックをおこなうこと、我々が現在まで行った極小未熟児就学前発達について資料をコンピューター解析(久留米大・栗谷先生)をおこなうなどについて話し合われた。

本研究が継続すれば、次回の会議は平成6年6月を予定している。

本年度の会計報告の提出締切は2月18日となっているので御留意いただきたい。